



Title	分かち合い、共に活動や価値を創造する異年齢集団の歩み：壁やイレギュラーとの対峙の中で、自己の生き方・在り方を見つめ直す
Author(s)	橘, 慎二郎; 前場, 裕平
Citation	子ども発達臨床研究, 12, 23-34
Issue Date	2019-01-31
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.12.23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72762
Type	departmental bulletin paper
File Information	070-1882-1707-12.pdf



分かち合い、共に活動や価値を創造する異年齢集団の歩み

— 壁やイレギュラーとの対峙の中で、自己の生き方・在り方を見つめ直す —

橋 慎二郎¹・前 場 裕 平²

1. はじめに

皆さんこんにちは。失礼します。香川大学教育学部附属高松小学校の前場といいます。昨日朝9時40分の高松空港発の飛行機で来ました。千歳には昼の1時半に着きまして、意外に近いかなという印象でした。このような機会を本当に与えていただき、ありがたいなと思っています。昨日、高松空港を出るときは16度ぐらいの気温でした。北海道は寒い寒いと言いながらも、まあ大丈夫だろうという気持ちで来たんですが、昨日の晩の吹雪に、我々は本当にこのまま遭難するんじゃないかとさえ思いました。しかも何とか乗ったタクシーが、本当にスピードを気にせずに走る、見えない道を走るということにカルチャーショックを受けまして、よく今日無事で来られていると思っています。



写真1

昨日はいろいろと北海道の名物を食べさせていただいて、力を付けてきました。整っちゃったんですけれども、よろしいですか。北海道とかけまして、「うる星やつら」と解くんです。その心は、やっぱりラムが欠かせないなと思いました。(拍手)

それでは、まじめに行かせていただきます。先週本校は卒業式でした。私は6年の担任でしたが、本校の卒業式では、1年生から6年生にレイ³を贈るということが伝統になっています。写真1を見ていただいたら分かるように、6年生で泣いている子がいたり、1年生を抱きしめたりしている姿がありました。レイを渡すのはほんの一瞬なのですが、その中で、どうしてこのような姿が出ると思いますか。レイの中身はこんな感じです(写真2)。縦割りで1年間一緒に活動してきた子からの言葉

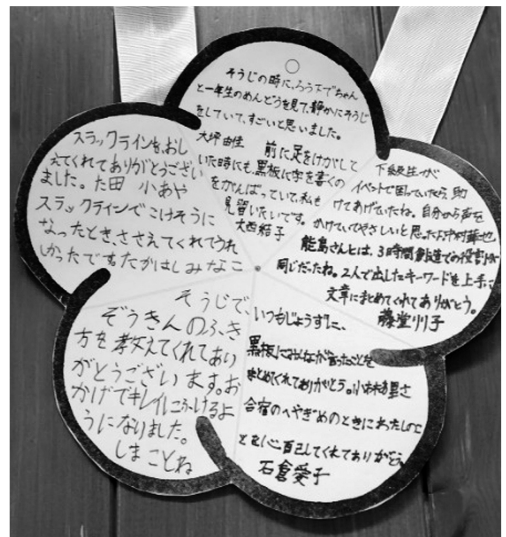


写真2

¹ 香川大学教育学部附属高松小学校 教諭(研究主任)、本報告の4.～5.を担当。

² 香川大学教育学部附属高松小学校 教諭、同じく1.～3.を担当。

³ ハワイの伝統的な装飾品で、花をつなげた首飾り等が有名。

と集合写真が入っています。本日は、異年齢の子どもたちが共にプロジェクト活動に参画する経験をすることで壁を乗り越えながら大きく成長する、附属高松小学校の全く新しいカリキュラムについてお話します。子どもたちが、卒業式で涙を流して別れを惜しむほどの関係性になるような、密度の濃い縦割り活動の形について提案できたらと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

2. カリキュラムの概要

(1) 縦割り創造活動

本校は平成25年度から28年度まで文部科学省の研究開発学校、そして平成29年度から教育課程特例校指定ということで、新たなカリキュラム開発に取り組んできました。この5年間で我々の実感として子どもが変わった、教師がすごい柔軟に問題解決できるようになっていったな、そして学校全体が変わってきたなと考えています。

保護者の意識の変化ということなのですが、5年間で自分と違う意見を持っている友達とも協力して、一緒に学んでいるとか、クラスや学年を超えて友達と一緒に何かを作り上げたり、新しい発見をしたりしているという項目が、すごく上がってきました。香川県の学習状況調査でも同様に、「難しいことでも失敗を恐れないで挑戦していますか」といった項目に対しても、本当に高い水準で、5年間で大きな変化をしてきました。

そのきっかけの1つと思っているのは、縦割り創造活動という本校独自のカリキュラムです。異年齢集団でのプロジェクト活動を通して、生き方、在り方を深化するということです。始めに川田先生もお話されたんですけれども、結構香川県の小学校はペア活動や、縦割り活動というのがあります。でも本校は、ほぼ毎日1時間その時間を取っています。掃除も縦割りで掃除をします。給食もランチルームというところがあって、これは定期的なのですが、ランチルーム給食もしています(写真3)。そのため、私自身自分のクラスもあるし、縦割りのクラスもあるという認識です。



写真3

本校が目指す子ども像というのは、どんな場所、時代、集団においても、いろいろな価値観の人と共に、よりよい未来を創造すること、そういう未来を生きる子どもたちに何を残し、どんな力を付けていくのかということでカリキュラムを考えています。そして「分かち合い、共に未来を創造する子どもの育成」ということを目指す子ども像として置き、学び続ける力、関わる力、創造をする力という、この3つの力を育成するといったことを重点的に研究しています。

(2) 2領域カリキュラム

カリキュラムの全体構想図は図1の通りです。教科学習は「学ぶこと」、創造活動は「生きること」ととらえています。この2領域が往還的に働いていくことで分かち合い、共に未来を創造する子どもの育成を目指していきたいと考えています。この2領域で資質・能力を養うシンプルなカリキュラムということで、今、我々は研究を進めております。

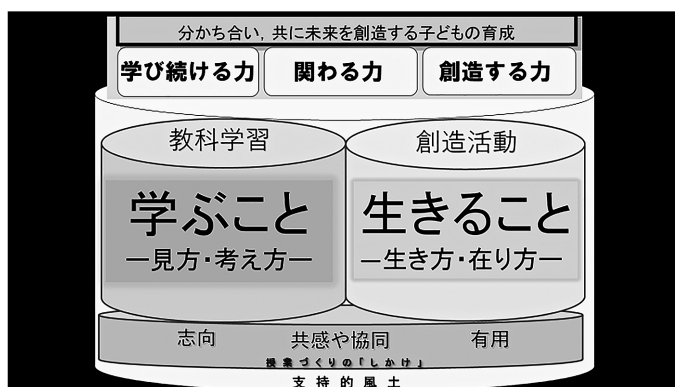


図1 香川大学教育学部附属高松小学校の2領域カリキュラム

方法として、授業づくりの「しかけ」を3つ挙げています。子どもたちの学びたいという意欲を高めさせるために「志向」、関わりたいという「共感・協同」、自分の活動の成果や伸びを実感したいということは「有用」として、ちょっと言葉は難しいんですが、いわゆる教師が子どもたちの欲求を引き出すために、我々は特にこういうような、子どもが元来持っている欲求を引き出すような指導をしていこうということで、この3つを仕掛けとして挙げています。

また本校では、毎日学級創造活動というものがあります。学級創造活動というのは、自分の好きなことを好きなやり方で、自由に行う。つまり橘先生のクラスで言うと、ねり消しをずっと1年間探究する子がいたり、野菜を作って教室で急にカレーを作り始めて、カレーを食べるということがあったり……。子どもが自己選択、自己決定のもとで活動するのが特徴です。

3. 創造活動の具体

(1) 道徳・特別活動・総合的な学習の時間の統合

ここで、本校の時程について説明します。本校は午前中が3校時で、その後が給食です。ランチルーム給食というのは縦割り給食です。その後に縦割りで清掃をして、縦割り創造活動へと入っていきます。1年生～6年生の問題解決で資質・能力を養うという、この縦割り創造活動を火曜日から金曜日に、毎日行うのが大きな特徴です。

次に、創造活動の具体です。異年齢集団でのプロジェクト活動を通して生き方、在り方を深化するという時間を、本校では「縦割り創造活動」として置いています。本校は道徳、そして特別活動、総合的な学習の時間という3領域を統合して創造活動という時間にしています。背景として、例えば道徳であつたら新しい教科、道徳になっていきますが、もちろん道徳という読み物資料で、文で分かるものもあるんだけど、異学年でプロジェクト活動するからこそ、いろいろな子どもたちの価値観が出る。そこで子どもたちが本気になって課題解決をしていく中で、もっと新たな、本当にこれから大事である生きた道徳の価値観が得られるのではないかと考えています。

総合的な時間については、私も公立で5年前まで勤務していたんですが、5年生は福祉のことをやります。6年生は環境をしますといった、その学校によって結構形づくられているところ、ルールがあるということが多いです。でも本校の創造活動は、子どもたちが追究したいことを決めて、プロジェクトを決定する。その切実な課題解決の中だからこそ、本当に子どもたちが、今こういう人を呼びたいんだ、

だからこのゲストに電話をさせてといった言葉や切実な思いが出ます。

また後で橘の方から、その実践があるんですけども、総合的な学習の時間や、異学年で、本当に興味を持って話し合うという特別活動の要素も、創造活動の中で出るんじゃないかと思います。創造活動は週4時間、年間175時間あります。そして2回の合宿があります。1年生～6年生で7月に、まず学校で泊まります。その後10月、11月ぐらいに、小豆島という小さい島があるんですけども、その小豆島に1年生～6年生で行って、1泊します。

(2) イレギュラーに出会うことと「価値創造」

その内容も縦割りは18クラスあるんですが、すごい自由で、そのプロジェクトに合わせて、例えば小豆島でしたら1日半ぐらい時間があるので、1日目の昼過ぎまでは島に行かずに、高松の方でプロジェクトをしないといけないことがあるから、それをしてから夕方に合流しますとか、岡山県に行って、それで昼までやってから、そこからまた小豆島に戻りますとか、結構その組に合わせて自由なプロジェクトのもとでやっていきます。

2回合宿して寝食を共にすることで、子どもたちの中でのいろいろな価値観が生まれたりとか、プロジェクトを進めていく中で、新たな価値観とかプロジェクトへの解決に向けて組がまとまっていくのです。我々が言いたいのは、先ほども先生方の実践を聞いて、一緒かなと思うんですが、やっぱり多様な価値観を持つ異年齢集団ということが、すごく大事だと思っています。やっぱり共に活動を行っていき、壁にぶつかったりイレギュラーに出会ったりする中で問題解決を行う。その過程で資質・能力は養っていくんじゃないかと考えています。

結構今の現場に行くと、トラブルが起こらないために、ちょっと組み合わせを考えたりとか、場所や活動を限定したりしています。我々もイレギュラーがいろいろ起こります。例えば、プロジェクトの中で、どこかに行こうとなったときに、1人トイレに行って出てこなくて電車で遅れたとか、香川県のPRをするために県庁に行く。県庁に行ってオーケーしていただけたらと思っていったらだめと言われる。リアルな社会だからこそ本当にそういうイレギュラーや多様な壁が存在する。それを乗り越えていく過程を重視することで、いろいろな価値観が生まれていくと。

そして問題解決の価値創造の一体化ということで、異学年だからこそ生まれる面白さもあります。高学年の子どもが1年生の意見を聞いて、それはすごいよねということで1年生の意見が採用される逆転現象が起こることも多々あります。活動の中で6年生では考えられないような考えを1年生、2年生がするというのも、本当によく起こります。そういった中で子どもたちが柔軟に受け入れ、今の時代に大事なリアルな価値を創造していきます。

子ども会のような家族のような、本校は特に高松市全部から来ているところもあって、なかなかそういう子ども会ということ子どもたちは味わっていません。そしてほかの学校を見ても、なかなか子ども会が機能していないところもあります。そのため子ども会のような家族のような、そういった活動を目指しています。

写真4と5は応援合戦の様子です。運動会で、本校はこれも縦割りをするんですけども、全部子どもたちが考えて、3分間の応援合戦のために、1ヶ月準備と練習を行います。今年度私が子どもたちとやって、優秀賞は取れなかったんですが、終わった後は縦割りのみんなが泣き、6年生も泣いてという姿も見られました。本当に素晴らしい経験を子ども達はしています。

では、創造活動の中で教師は何をしているかということを考えます。ただ単にやらせました、自由にさせただけではいけません。教師は「見取り、考える、返す」ということを中心に行っています。

子どもたち1年生から6年生が、どういうふうに関心しているか、個々でどういうふうに関心しているかというのを見て、教師がどういうことを返していけば有効かを考えます。

創造活動って子どもが中心ではありながら、教師は意図や腹案を持っていて、うまくいこうなるように仕掛けていっています。思ったようにならないことも多々あるんですけども。そういった状況で、こういうふうな言葉を返したら、問いかけたら、もしかしら子どもたちがそれに気付いて、今度はこういうふうにしていこうという話も出てくるのではないかな。この価値に気付くのではないかな。そういった「見取り－考え－返す」ということを中心に行っています。

実践紹介ということで、実は18学級の縦割りがありまして、その1つの学級の紹介ということで、本校の研究主任である橋の方から実践の紹介をさせていただきます。



写真4



写真5

4. 縦割り創造活動の実践紹介

(1) なぜ縦割りか

失礼いたします。附属高松小学校研究主任をしております、橋といいます。よろしくお願いします。先ほど前場の方からあった中で、少し補足というか説明をさせていただくんですけども、なぜ縦割りで活動をするのかということです。小学校でも縦割り活動は、たくさんあちこちの学校でされているんですけども、縦割りで1年生から6年生までと一緒に活動をするというのは、ある意味やりにくさがあります。

黒板に1つ文字を書くにしても、平仮名で書くのか漢字で書くのかとか、みんなの前で1年生がうまく発言できないとか、いろいろな壁があるわけです。私たちはそういった壁を、あえて生むというか、多様な価値観や背景を持った子どもたちが、あえて苦労しながら1つのことを求めていく状況を生むというのが、縦割りの1つの大きな良さじゃないのかなと思っています。

子どもたちがぎりぎり乗り越えられるであろう壁を、あえて残しておいて、そんな中で子どもたちの姿を見守っていくという中にこそ、成長ってあるんじゃないかと思います。この後、実践紹介をするわけですけども、よくあるのは6年生が1年生のお世話をすると。そして1年生が6年生にあこがれを持っていく、まさにあこがれといたわりというのが当然あるわけですけども、それを越えていくというところもあるのではないかと私たちは思っています。

本校のプロジェクト活動というのは、1年生と6年生が同じ夢を見るわけです。同じ願いを持って、1つのところに向かっていく。つまりお互いを見て、関わり合い自体を目的とするんじゃなくて、違う者同士が一緒のところを目指していくことによって、逆転現象も起こるし、多様な価値観、ぶつかり合いも起こるし、成長が起こる、そういう考え方です。ちょっとそういう目で実践紹介を見ていただきました

いですし、こんな実践をしていますよというだけじゃなくて、やっぱり香川からせっかくやってきて、北海道の先生方に何か恩を返すというか、何かいいお話ができたと思いますので、実践紹介をお聞きになりながら、一般化、つまり、どういう活動をしたら幼稚園でも小学校で、また異校種でも異学年交流、異年齢交流が有意義なものになるのかというヒントをみんなで考えていけたらと思っています。

(2) 野菜を生産する(写真6～7)

ちょっと前置きが長くなったんですけども実践紹介に移ります。これは私が2年前に実践した縦割り創造活動です。まず願ひからスタートをするのが我々の活動です。この年は、自分たちの手で何かを商品化して、大人が本気で求めるものを売ってみたい、お金をもうけるって大変なんだろうということで、最近話題になっている農業の6次化に挑戦してみた1年でした。生産・加工・販売という、あちこちの農家で失敗している、難しい取り組みに対して、本当に子どもの手でそんなことができるのかということで、挑戦してみたいというふうに話が進んでいきました。コンセプトとしては、必要なものは自分たちで作ろう、そしてみんなでやるということです。

まず生産編です。まずここからスタート、草ぼうぼうの畑に行って、ここからどうやって商品を作るかというところで、途方に暮れたところからスタートです。こんなところからスタートをしたんです。用務員のおじさんをお願いして、トラクターをかけてもらった後、畑づくりをしていくということで、みんなでこうやって田んぼを耕していくんですけども、私はあえて何もしませんでした。写真とビデオを撮っただけです。

堆肥がくさい、くさいと言いながらみんなで混ぜたり、水の通り道を作ったりしていくんですけども、畑を作るだけで1カ月ぐらいかかりました。毎日作業をして、うねをこうやって、棒でやったら平になるぞということを誰かが発見して、それをやっていくわけです。5週間かけて、やっと畑が完成して、そこにマルチを張ったりして、苗を植えていきました。種苗会社に電話をして、何の苗が何本欲しいんですというのも子どもたちがやりました。

植えつけをして、最初はこんなにぼうぼうの畑が植わったというときの感動は、やっぱりありました。ミニトマトの支柱を立てたりして1カ月後、見事に育ってくるわけですけど、この間の水やりとか休み時間のお世話も子どもが勝手にやって、私はもう枯れてもいいやぐらいのつもりで、どんと構えていたんですけども、子どもが一生懸命やりました。



写真6



写真7

(3) ジャムに加工する (写真8～9)

しばらくすると、ミニトマトがだんだん実ってきたり、スイカができてきたり、畑全体が育ってくるわけです。商品は何を作るかということ子どもたちで話し合っ、保存が利くもので、しかも個包ができるものでいろいろ考えて、もうジャムしかない。ジャムしかないから野菜を作って野菜ジャムを売ろうということ始めたんですけれども、夏休みが大変でした。子どもが交代で学校に来て水やりをしたりして、一生懸命お世話をしていくんですけれども、香川は水不足なので雨がまったく降らなくて、すごく困りました。

もうとにかくスイカが枯れ枯れでピンチで、このままではスイカが死んじゃうということで、2万円 で冷凍庫を買いました。年間の活動費に1人1,000円ずつ集めて、3万5,000円の資金しかありませんでしたが、取りあえず2万円 で冷蔵庫を買って、これでもう何とかスイカをもたせようということで、スイカを切って冷凍保存で何とか助けるということで、夏休みは必死でした。

1回冷蔵庫にスイカを保存したら学校が停電になりまして、そのときはもうスイカが腐ると思って、もう必死で、ローソンで大量の氷を買ってきて、氷で何とかするとか、イレギュラーの連続でした。そして夏休み中、子どもが代わりばんこに学校にやってきて水やりをしたり、収穫したミニトマトなどを冷蔵庫の中に、どんどん放り込んでいったりしました。

当然冷蔵庫がいっぱいで足りなくなっていて困ったなと思っていたら、子どものお父さんの会社で余っている冷蔵庫を1個ただでもらえまして、だったら買わなかったらよかったと思ったんですけど、そんな中で子どもと一緒に夏休みは何とか過ごし切りまして、ようやく新学期を迎えました。カボチャがこんなのか(手で大きさを表して)取れなくて、こんなカボチャで大丈夫かと思ったけれども、取りあえず保存をして、次は加工です。

ショールームのキッチンを交渉して貸してもらって、そしてカボチャなんですけれども結構きれいで、ちゃんと子どもたちで加工できました。これは全部あの畑から作ったトマトとかカボチャとかで、すべて材料は自分たちで作ったところに値打ちがあると思います。子ども自身が、知り合いのシェフの人に電話をして、どうやったらジャムが作れるかを聞いてやっていく。

この活動に限らず、プロジェクトの内容は昨年度までは本校にはなかった活動で、子どもがやりたいと言ったから始まった活動で、1年こっきりの活動なので、大変ですけれども、それはやっぱり子どもと先生と一緒に考えながら生み出していくという過程にこそ価値があって、子どもの「ああしたい、こうしたい」という発想が生きていくんです。

イチジクも校庭の庭でなっているやつを勝手にもいで、ちぎってきて、冷凍しておいたものを使いました。スイカジャム作りは大変でした。スイカの種



写真8



写真9

を一個一個手作業で取って行って、まさに試練でした。そしてそもそも、水分90%のスイカをどうやってジャムにするのか……。ここまで作って気が付きました。そして、サツマイモ。これも畑で取りました。それでジャムを完成させて、小瓶に入れていくんですけども、1つ100グラムを厳密に量って商品にしました。スイカも午前中にずっと煮込んで、やっとジャムができました。意外とたくさん、2.2キロできました。にんじんジャムも作りたかったのですが、にんじんは全部枯れてしまって全滅したので無理でした。

(4) ジャムを販売する(写真10~14)

次は販売編なんですけれども、ここからが子どもの創意工夫が生かされたところです。まずジャムを売るに当たって、1年生の子がイメージキャラクターを作りたい、キャラがないと嫌だということを言い出して、じゃあ、キャラを作ろうということになりました。まずキャラの名前を決めるのに2時間かかりました。

トマッチがいいとか、トマピーがいいとか、大人からしたらどうでもいいんですけど、子どもはトマピンがいいとか、何とか、かんとか、ずっとわーわー言いながら話し合って、結局決まっていくんですけど、1年生から6年生までが平等に出して、本気でけんかをするわけです。

1年生が言うからそれにしよあげようじゃなくて、こっちの方からいいから、絶対こっちやといって、もめにもめていくんですけど、そんな過程も子どもが成長するチャンスだと思って見守りました。それで、この1年生とかがラフスケッチをしたものが、本当のキャラクターになっていくんですが、最後はイラストレーターの人に書き直してもらって、それでとうとう完成していくわけです。これはシールにしました。

ほかにはやっぱり販売用のジャムの箱がいるんじゃないかということを、今度は6年生が言い出して、箱の採寸をして、それで作業場を作って、でも自分たちだけじゃあ、作れないということで、保護者に大工さんがおるやん、大工さんと呼ぼうということで大工さんと呼んで来て、みんなでわーわー言いながら箱を作っていくって完成したりする。あとは看板がなかったらお客さんは来ないだろうということで、今度は看板を作り始めたり、お店も作ったり、ジャムにシールを張ったり……。どんどん子ど



写真10

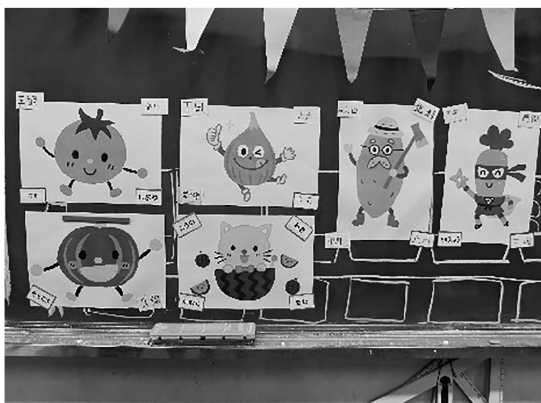


写真11



写真12

ものアイデアで広がっていくわけです。そしていよいよ販売です。

販売するときに売れた感動も当然あるんですけど、お客さんがやってきて、どうやって作ったんとか聞くわけです。そうすると子どもって、大事に大事に1年間やってきたから、たたき売りをしない。

どんどん売ってお金だけ稼ごうとしないで、こうやったんだ、ああやったんだと、語る子どもの姿がすごく頼もしくてうれしかったんですけど、やっぱりうまくいかなさを乗り越えてきて売れていくという感動がありました。伊藤先生も買ってくれました。お世話になった用務員さんにもちゃんと最後はプレゼントしました。売上金をどうするかというのも子どもと相談をして、ウサギ小屋のドアが、最近かじられてぼろぼろだから直そうということになりました。

知り合いの大工さんに頼んだら、ただでやってもらえるんだけど、やっぱりお世話になった大工さんだから、きっちり3万円売上金を払ってドアを作ってもらおうということで作ってもらったり、義援金として被災地への募金もしたりして、こういうゴールも子どもが決めるというところが1つの魅力かなと。

(5) 教師の役割 (写真 15)

写真 15 は畑の脇の用水路を掃除しているんですけど、誰かが困っていたら、どんどん次の子が助けに来るわけです。ここでは、学年が上も下もなく、みんなで何とかしないといけないということで、みんなが集まってくるんです、自然に。もうどろどろになりながらやるんですけど、汚いとか嫌だとかせずに、違う方を見ると、こうやって水をこっちでさらえている子がいたりして、必死になっているんです。必死をどうやって生み出していくのかということが、1つの僕らの腕の見せ所です。

ほかにも例えば、畑の作業をしないといけないときに、1年生がムカデを見つけて大騒ぎをするんです。それにまたみんなで分かち合って、1年生がムカデを見つけて騒いでいることがかわいくて、みんながそこに乗かっていくんですけども、そんなこともあって、大人からしたら、こう進めないといけないということをあえて言わずに、見守っていくというのがやっぱり大事なんです。こういう姿を一



写真 13



写真 14



写真 15

歩引いて見てやる、長期的に見てやるということが大事かと思うんです。

ほかに本気の場面ということで言うと、ジャムを何円にしたら売れるか。あれだけ苦勞をして作ったスイカジャムなんだから、1瓶1,000円にしようという子がいたり、それだったら売れないから300円ぐらいだろうという子がいたりして、こういうのも子どもがわーわー言いながら決めていくんです。縦割りでやるから、一つ一つの活動がすごく時間がかかるんですけど、その時間がかかるということを、無駄ととらえるかどうかというのが、教師の教育観です。

5. 「あこがれ」と「いたわり」の先にあるもの

(1) ジャムのその後(写真16~19)

時間は前後するんですけども、1年生を初めて教室に迎えるのに、どんな迎え方をしたらいいかということをもみんなで考えて、1年生をこうやって部屋に迎えるんですけど、1年生が1年間かけて育っていく過程をみんなで見るというのは、やっぱりすごくみんなにとってもうれしいし、お互いの成長を間近で見られるというのはいいですね。

あこがれやいたわりというのは当然あるんですけど、それだけで終わらない価値が縦割り創造活動にはあると思います。6年生が卒業する前に、6年生にありがとうの会をやるんですけども、このときに6年生にジャムを食べてもらいたいということになりました。ジャムを売り上げることに必死になって、1~5年生の子どもたちは自分ではジャムを買ったり食べたりしていないんです。自分らのジャムを食べたいという子もいたけど、ほとんどの子がお世話になった6年生にこそあげたいといって、1年生~5年生の子はジャムを食べずに6年生にあげるわけです。

6年生は、自分の食べたジャムを持って帰らずに、今度は1年生から5年生に分けてあげたいといって、おはしを持ってきて、今度はみんなにあげるわけです。そういうことが自然と起こっていく。やっぱり縦割りの活動やるに当たって、お互い違いがあるからこそ求めていける育ちとか学びというのがあって、だから我々がやっていることが答えの1つなのかもしれないなとは思っています。

このような活動を行うときに大切なことの1つは、「待つ」ということです。すぐに結果を急がずに、子どもたちが必死になっていることって何なんだろうって、先生が待ってやるということが、子どもの成長を促すチャンスかなと思います。それと集団でやっているから、なかなか個の姿が見えにくくなります。個々の背景をどれだけ深く見ていくかというのは、我々が幼児教育から学んだことです。



写真 16



写真 17



写真 18

動画を撮って後から見て分かることもあれば、エピソードで分かることもあるんですけど、集団で活動するからこそ、個というものにどれだけ我々が目を向けていけるかということが大切であると思います。

(2) 「共通の願い」が育ちを支える

これはジャムとはまた別の3年前の活動なんですけれども、長縄を練習して世界一、ギネスに載ろうと無謀な挑戦をやり続けてみました。こんなの体育でもできるだろうとか、ここにいる前場にも散々批判されまして、こんなのは縦割りでやることじゃなくて体育で、部活でやったらいいと思うって散々言われたんですけど、僕はこれで子どもたちを最高に成長させてみせるっていう、結局貫き通してやった思い出の実践です。



写真 19

始めてみて、当然1年生が全然できないわけです。個人差もあります。例えばぽっちゃりした女の子がいて、グループ練習をやるんだけど、当然全然できないわけです。何度挑戦しても、その子のところでひっかかってしまう。これが壁なんだけど、そこでこの子ができるように活動を最初から設定するということもあるんですけど、この子ができるように、この壁をみんなで乗り越えていけるようにしていくというところが、1つのストーリーの作り方で、例えばほかにも2年生の女の子なんですけれども、この子も全然できないわけです。

全然できなくてみんなで話し合いをしたときに、私のせいでチームの記録が伸びないとか、泣いたりするわけです。でもよく見てみると、失敗したら失敗した子のところに上級生が寄って行って、あしほのたまかた、こうしたらいいって声をかけ始めるんです。それを僕は待っていたわけで、例えばうまくいかなかったら、やっぱりそれだけ学びが生まれるわけで、こういう並び方をした方が、もっとうまく跳べるんじゃないかとか、こんなふうにしたらいんじゃないかということの話し合いが生まれたりするんです。

僕が感動した場面があって、休み時間に中庭に低学年の下手な子同士が自然と集まってきて、勝手に自主練を始めることがありました。これこそ僕は育ちだと思ったんですけど、こうやって体操までして、子どもたちが6年生とか5年生にまったく断りもなく集まってきて、いきなり練習を始めるというのが、これはすごく心の成長だと思いました。

低学年の子どもだけですので、当然まったく練習はうまくいきません。ひもが絡まったり回せなかったり、もう全然だめなんですけれども、僕は一切助けませんでした。そうすると6年生がこの後助けに来るわけです、自然に。

このときの1年生のうれしそうな顔が、僕は忘れられないんですけど、こうやって6年生が助けに来て、私たちがやってあげるよということなんですけど、6年生も助けたい一心で来るというよりも、それもあるんですけど、世界一を取りたいという共通の願いがあるから、一緒に頑張ろうということで来るわけです。

そんな場面があったりして、最後はうまくなるわけです。最初は跳べなかった女の子も、余裕で跳んでいくわけです。ここに行くまでには相当なぶつかり合いもあったし、けんかもしましたし、いろいろなことがありました。同じようにギネスに挑戦した学校の先生や子どもに、手紙を書いたりもしました。最後の場面では一人一人の背景を知っているから、僕もビデオを撮りながら涙が出たんです。

ずっと跳んでいってやっていくんですけど、最後に記録が出たときの喜びようというのが本物だなと思います。3分間で347回跳んで、結局世界一の記録は取れなかったんですけど、縦割りで跳んだ記録としては、香川県チャンピオンの記録になりました。最高記録が出た瞬間、子どもたちの心にはいろいろな思いが走馬灯のようによみがえってきて、本当に分かち合って喜ぶ姿がこちらもうれしかったです。

(3) おわりに

最初に卒業式のレイの写真をお見せしましたが、単なる1年生と6年生の関わりという、そのシーンだけを求めたら、ほんの首にレイをかけてあげる一瞬、数秒で、やっぱり6年生が泣くということはないんです。たったその何秒間の中で6年生が1年生の子をぎゅっと抱きしめたり、ぼろっと涙を流したりするというのが、1年間の活動を背景にしたところから生まれていくということです。我々がやっているこの取り組みが、このやり方が一番いいのかどうかということは分からないんですけど、そういったことを挑戦してやっています。

今回のフォーラムのテーマで、あこがれといたわりを越えるというところがありますが、我々の結論としてはあこがれもいたわりも、当然あると。前提として当然あって、それがないと縦割りって成り立たないんです。だけど、その先もあると思います。やっぱり活動の前に、どういう子どもを育てたいかという目的をしっかりと見据えた上で、徹底的に待つ姿勢を教師が持つとか、一人一人の子どもを肯定的に見るという教育観をもちながら指導にあたっていくことが大切だと思います。我々もこういった活動をさせていただきながら、子どもたちに教えられることがたくさんあって、本当に教育観も変わり、成長していけているなという思いがあるので、今日はこの後の話し合いの中でも、先生方と語り合いながら、どういったことが本当の幼稚園、保育園、小学校の現場にとっていいのかということを、また交流できたらうれしいなと思っています。以上です。ありがとうございました。